

【論文】

幕末における西洋自然史博物館の受容

— 万延元年 (1860年) 遣米使節団とスミソニアン・インスティテューション —

Japanese Reception of Western Natural History Museums at the End of the Edo Period
— Man'en Gannen Mission at the Smithsonian Institution in 1860 —

財 部 香 枝^{*}
Kae TAKARABE

Abstract

In 1860, the Tokugawa Shogunate sent the Man'en Gannen Mission to the United States of America to ratify the Japan-U.S. Treaty of Amity and Commerce. While in Washington, D. C., the mission had a chance to visit a natural history museum in the Smithsonian Institution. It was the first official Japanese visit on record to a Western museum.

In this paper I will first trace how the Japanese mission came to visit the Smithsonian Institution, using hitherto unexamined archival materials, and then will describe the actual conditions and organizations of the natural history museum in the Institution in 1860. Finally I will interpret mission members' understandings and perceptions of the museum.

It is true that the mission members' experiences in the museum did not have any immediate or direct effect upon the creation of the Japanese first natural history museum. Their experiences should not be underestimated, however, as a historical fact in the process of Japanese receptions of Western natural history museums.

はじめに

本稿の目的は、万延元年(1860年)遣米使節団による西洋自然史博物館の受容過程を探究し、同使節団の意義を再評価することである。同使節団は、日米修好通商条約批准書交換を目的として徳川幕府によりアメリカ合衆国に派遣された。その派遣は日本側からの発案であり、アメリカ合衆国の視察もその目的の一つであったことは周知のとおりである。使節団の構成は、使節3名(正使・新見豊前守正興、副使・村垣淡路守範正、監察・小栗豊後守忠順)、役人17名、従者51名、賄方6名の総勢77名からなる。彼らは、ワシントンにおいて、スミソニアン・イン

スティテューション(Smithsonian Institution)とパテント・オフィス(Patent Office)を見学する機会をもった。これらは、日本人が公式に実見した最初の西洋博物館であるとされている(東京国立博物館編 1973: 9-10)^(註1)。このため、西洋博物館の受容過程を探究する上で、同使節団に関する調査が重要であることは言うまでもないが、残念なことに、先行研究は、同使節団員が残した日記内容の調査に留まっている。

そこで本稿では、これまで看過されてきたアメリカ側の資料を用いて、西洋博物館受容における新たな一面を提示したい。具体的には、同使節団が訪れ

*名古屋大学大学院

平成10年1月9日受理

た両施設のうち、当時すでに自然史博物館を所有していたスミソニアン・インスティテューションに焦点を絞り、(1)合衆国関係者が日本使節団に同インスティテューションを見学させることになった経緯を辿り、(2)実見した博物館の実態を具体的に提示することによって日本人が最初に受容したものを明確化し、さらに(3)それを同使節団員の日記と比較・対照することによって、西洋自然史博物館受容過程を総合的に分析し、同使節団の意義を再評価したい。

西洋自然史博物館の受容を論じる前に、物産会について敷衍しておきたい。全江戸時代を通じて、常設の博物館施設は発達しなかったが、江戸時代後期には、期間限定の現代の特別展にあたるものが出現し、発達をみた。それが、1757年以降江戸で、またそれ以降、大阪、京都、名古屋各地で開催される物産会(あるいは、本草会、薬品会、博物会、産物会)である(上野 1973 : 56-9)。各地からもの(動植物、鉱物などの標本)を集め、整理して見せ、不明なものは鑑定し、解説書を出版するという物産会の機能は、明治初期に伝えられたとされる西洋博物館思想に見られる機能——資料の保存・収集、調査・研究、展示・教育——と類似である(椎名 1989 : 43-7)。すなわち、万延元年遣米使節団派遣時には、日本ですでに西洋自然史博物館の素地が築かれていたことには留意すべきであろう。

1. スミソニアン・インスティテューションの見学経緯

受容研究においては、受容国、被受容国両者の資料・記録を比較・対照することが肝要である。しかしながらいままでの西洋博物館受容研究では、「受け取り、取り込んだ」日本側ばかりが注目されてきており、被受容物すなわち博物館を「受け取らせた」側の事情は勘案されてきていない。実際、合衆国滞在中、アメリカ側によって国賓、すなわち遣米使節団の行動や旅程が注意深く詳細に計画されていたとされ(Yanaga 1940 : 123)、また次のような指摘もある。

旅の間中ずっと、使節一行は自分たちの計画に関してきわめて受身であったように思われる。旅程はすでに組まれており、輸送機関も手配済みで、全費用をアメリカ(つまり合衆国および

市の政府と有志組織)が支払っていた。……彼らが訪れるのはたいてい儀典官のすすめるところであった。自発的な旅をするには少なくとも訪れる国と国民についていくらかの知識が必要であるが、万延元年遣米使節はアメリカについて最低限の知識すら欠いていたのである(ミヨシ 1984 : 62-3)。

実のところ、アメリカ合衆国側に組織された日本遣米使節団担当委員会(Commission, in charge of the Japanese Embassy to the United States)が、同使節団に見学させるべき施設・機関を選定し、その中の一つとして(博物館を所有する)スミソニアン・インスティテューションが選ばれた。続いて、同委員会を中心とした合衆国関係者がスミソニアン・インスティテューション(およびその博物館)を日本使節団に「受け取らせた」経緯を明らかにした。

1860年4月26日付けの国務長官ルイス・カス(Lewis Cass, Secretary of State)から海軍大佐デュボン(Samuel F. Du Pont, Captain, U. S. Navy)宛て書簡の中には、デュボンを日本遣米使節団担当委員会の委員長として選定し、さらに同使節団の訪問先選定などを一任する旨が記されている^(註2)。後日、シドニー・スミス・リー海軍中佐(Sidney Smith Lee, Commander, U. S. Navy)、デヴィッド・D・ポーター海軍大尉(David D. Porter, Lieutenant, U. S. Navy)も委員に選定される。彼ら3人はともにペリー使節団に加わっており(ミヨシ 1984 : 53)、日本使節団を担当するのに適切とみなされたのであろう。この他、書記マクドナルド(C. J. MacDonald)、オランダ語通訳ポートマン(A. C. Portman)を加えた5人によって同委員会は構成された。

ここで特筆すべきは、上記カスの書簡より20日も前に、スミソニアン・インスティテューション長官ジョセフ・ヘンリー(Joseph Henry, Secretary)が日本使節団招待に向けて動き出していたという事実である。ヘンリーは4月6日付けの大統領ジェームズ・ブキャナン(James Buchanan, President)宛書簡の中で、「日本の歴史、風俗習慣に精通している紳士ロジャーズ大佐(Rodgers, Captain)」の「日本使節団に関する提言」に言及する。ロジャ

ズ大佐とは、北太平洋探検調査遠征に参加し、沖縄に上陸して現地人と接触したり、日本沿岸やオホーツク海を調査したりした人物である（Malone ed. 1935 : 77-8）。この提言は、元々は両者の会話においてなされたものを、その重要性に鑑みデュボンがロジャーズにまとめるように促したものである。

書簡に同封されたロジャーズ大佐の提言には、次の記述が含まれている。

当使節団に我々の文明と制度の優越性を好ましく印象づける唯一の方法は、我々の科学、芸術、武力、政府について明白な概念を与えることである。このため使節団に様々な学術機関を見学させるべきである。・・・彼らに対する一連の科学実験はスミソニアン・インスティテューションで行うのがよからう。そこでは、現代の発見の最も興味深い結果が示されるべきである（註3）。

ヘンリーはこの提言を引き合いに出し、「諸提言の一つはスミソニアン・インスティテューションの協力を示唆しており、この取り決めのために、該当箇所で要求される任務がスミソニアン・インスティテューションで快く引き受けられるであろうことは言うまでもない」と記して、大統領に同インスティテューションの存在および協力体制を力強くアピールする（註4）。

その後、ヘンリーはデュボンに数回にわたりアプローチを繰り返す。5月17日付けの書簡は、実験準備に向けて使節団の訪問日程・時刻を問うものである（註5）。これを受け、デュボンの命を受けた委員会書記マクドナルドからヘンリーに宛てた5月19日付けの書簡は、翌週初めに行われる批准書交換の儀式の後、使節団は実験を見学できるだろうし、改めてデュボンが訪問時間等を貴殿と協議する、という内容であった（註6）。

5月22日に使節団が大統領との謁見を終えてから一週間経ったにも関わらず訪問日程が決まらないため、5月30日ヘンリーはデュボン宛に最後通牒とも言うべき書簡を送る。

私たちは、東洋人に敬意を表するため、極めて広範な準備を進めてきており、もし彼らが当インスティテューションを訪問しなければ、落胆を禁じ得ない。私は [ママ] 博士と共に数日

前、ポーター大尉から使節団を紹介され、当インスティテューションへ個人的に招待した。・・・ガルバーニ電池充電のために、予め約1時間前にお知らせ願えれば、今日、明日の何時でも彼らを迎えることが可能である（註7）。

その3日後の6月2日午後2時、日本使節団の正使・新見豊前守正興、副使・村垣淡路守範正らの同インスティテューション訪問が実現することとなる。

この一連の書簡のやりとりから、ロジャーズやヘンリーが自国の文明の優越性を強く意識していたことは明白である。ヘンリーが、自国の優越性を日本使節団に印象づけるためにスミソニアン・インスティテューションで最新の科学実験を行うことを熱望したのは、彼自身が電磁気の分野における一流の物理学者であった（アボット 1986 : 191）ことを勘案すれば、当然のことだったのであろう。ヘンリーが日本使節の前で行った実験は、次のとおりである。

広い席でエレキテル機械種々ある。窓を閉じて暗くし、稲妻の実験。排気器の種々の作用を見せ、電流で木炭を燃やし、磁石に電流を通じて鉄器のいろいろな作用を見せ、蓄電池の取っ手を握らされたり、灯台用のレンズを見せられなどした（尾佐竹 1948 : 65-6）。

『日本遣米使節団担当委員会記録』には、上記訪問に関して以下のような記録が残っている。

6月2日土曜日・・・午後2時ポーター大尉の案内で、使節および数名の役人がスミソニアン・インスティテューションを訪問した。長官のヘンリー教授は、数々の興味深い物理学・化学実験を行った。それらの実験は念入りに準備されたものであった。彼は実際に空気圧の法則の実験を行ったり、ガルバーニ電池や電光などを示したりした。インスティテューションの所有物、すなわち世界中の興味深くて珍しい物同様に図書館や博物学標本の価値あるコレクションが、訪問者に示された（註8）。

さて、ヘンリーの一連の書簡からは、6月2日より前には使節団員は一人も訪れていないような印象を受けるが、彼らは「全員が揃って同一の期日に見学したのではなく、随時幾人かがグループになって、多忙な業務のあい間をみて見学している」（椎名 1988 : 16）。使節団員の見学日程については、表 1

を参照してほしい。ヘンリーは当然のこと日本使節団の中の下級役人や従者等ではなく正使や副使の招待を念頭に置いており、実際に科学実験を行ったのは正使、副使の訪問時のみである。しかしそれ以外の場合でも、前述のようにアメリカ側が博物館収蔵の「博物学標本の価値あるコレクション」と評価するものを使節団員は実見したのである。次に、彼らが実見した博物館の内容を紹介したい。

2. スミソニアン・インスティテューションと自然史博物館

(1) スミソニアン・インスティテューション

スミソニアン・インスティテューションが、現在17の博物館・美術館、国立動物公園、および多数の研究施設からなり、世界有数の総合研究機関であることは周知のとおりである。同インスティテューションは、イギリス人科学者ジェームズ・スミソン (James Smithson) が「スミソニアン・インスティテューション」という名の下に、人類の知識の増進と普及を目的とした機関をワシントンに設立するため、アメリカ合衆国に「寄付するとして残した莫大な遺産に基づき、1846年8月10日付議会条例によって発足した (Rivinus and Youssef 1992: 6-16)。

上記条例「理事は当該地を選んだ後すみやかに、地質学や鉱物学を含む博物学研究対象物の受入と整理のための任意の規模の適切な部屋やホール、および化学実験室、図書室、画廊、講義室を伴う・・・適切な建物を建設させることを定める」に沿うかたちで1847年に着工したスミソニアン・インスティテューション・ビルディングは、ようやく1855年に完成した。遣米使節団が訪れた1860年は、その完成から5年後のことである。その建物は、2階建て本館、東西翼、および9つの塔からなるロマネスク様式で赤い砂岩からできていた。当時は、広大な敷地内に、その建物と回りに植えられた木々があるのみであった。

しかし、スミソニアン・インスティテューション・ビルディングしか建っていなかったとはいえ、本館2階中央には、講堂および演台、東に機械室、西に画廊がある他、長官室、評議委員室などがあり、また本館1階の大広間は博物館に当てられていたほか、

図書館は西端に、一方博物学室、化学実験室、交換室、出版室は東端に、さらに敷地内に磁気観測所もあった。すなわち、現在に比べると規模こそ小さいが、1860年当時の同インスティテューションは総合的な研究機関であり、天文学、地理学、気象学、地質学、植物学、生理学、比較解剖学、動物学、(記述的な)博物学、地磁気、アメリカの遺物、(インディアンの言語との)比較言語学等、幅広い研究を推進していた (Rhees 1857, 1863: 8-9)。

先行研究では、スミソニアン・インスティテューションという研究機関を博物館的施設として漠然と捉えてきた経緯がある (椎名 1988: 24-5)。しかしながら、上記のように、同インスティテューションは当時すでに総合的な研究機関であり、その機関が運営する諸施設の中の一つとして「博物館」がスミソニアン・インスティテューション・ビルディングの中に存在していた点には留意の要がある。西洋博物館受容研究、とりわけ受容した西洋博物館観を引き出すためには、「博物館」と定義されていたものの実態を正確に把握することは不可欠だからである。同インスティテューションにおいて「博物館」と定義されていたものは、動植物、鉱物、人類学的資料を扱う自然史博物館であったことを筆者は明らかにした (財部 1998: 170)。次に、その実態を紹介したい^(註9)。

(2) 自然史博物館

ここでは、博物館の実態を博物館活動の3つの要素——「収集・保存」「調査・研究」「展示・教育」——ごとに見ていくこととする (倉田・矢島 1997: 36)。

① 収集・保存

スミソニアン・インスティテューションの初代長官ジョセフ・ヘンリーは、既得物を収納する博物館は同インスティテューションの使命である知識の「増進」には繋がらないと考えていたため、当初は博物館運営に消極的であった。このようなヘンリーの考え方を反映して、1850年に博物学を専門とするスペンサー・フラートン・ベアード (Spencer Fullerton Baird) が副長官に就任して彼自身が収集した多数のコレクションを寄贈したにもかかわらず、それらは数年の間大衆に展示されることなくもっぱら研究用

として用いられた(Rivinus and Youssef 1992: 57)。

一方、政府の探検隊・学術調査隊によってもたらされた博物学のコレクションは全て、国立科学振興協会の名のもとにパテント・オフィスに保管されていた。探検は、オーウェン博士等の合衆国地質調査、合衆国およびメキシコ境界調査、太平洋鉄道調査、ウォレン中尉によるイエローストーン探検、ブライアン中尉による調査、合衆国海軍天文探検、北太平洋ベーリング海峡探検、日本遠征、パラグアイ探検など多岐にわたっていた。各探検隊は、移動する地域の自然誌的特徴を示すようなコレクションを収集するよう命じられていたので、結果的に、世界中で最大最良の北米大陸全体の鉱物、化石、岩石、動物、植物のコレクションとなっていた(Rhees 1857, 1863: 22)。

このようなコレクションの増加に伴い、1857年3月、議会はそれらをスミソニアン・インスティテューションに移管することを以下のとおり決定した。

合衆国に属し、ワシントンにあり、誰の管理下にあっても、全ての美術品や外国の興味深い研究対象物、および博物学の全ての物、植物、地質学、鉱物学の標本は、それを受入れる評議委員会によって権限が与えられる人に送付され、同インスティテューション用の前述の建物の中で、それらの研究を容易にするように分類・整理されること。(以下略)(Sec. 6)

このほか議会は、新ケース購入や引っ越し費用、毎年の維持費4000ドルの支出も認めた。こうして1858年同インスティテューションは博物学の標本を受領して展示することになった^(註10)。それを機に、ヘンリーは博物館運営に積極的に乗り出す。それは、ヘンリーがその標本の移管を「スミソニアン・インスティテューション史上、最も重要な出来事」(Henry 1859: 13)と位置づけることから窺えよう。

これと同時に、副長官ベアードは博物館の管理・運営に従事するようになる(Rivinus and Youssef 1992: 64)。ベアードは、科学研究においては、標本コレクションをできる限り多く収集し、それらの注意深い比較から結論を引き出すべきであるとの考えに立っており、このような考えの下に、博物館は

着実に整備されていった(Rivinus and Youssef 1992: 133)。表2「博物館における年次別コレクション登録数」からは、1858年以降、登録標本が増えたばかりでなく、分類面も整備されていった様子が読み取れる。

ヘンリー長官の方針に従って、主に北米の博物学標本シリーズを完成することが最優先とされていたため、1860年の時点で、北米の哺乳類やその頭蓋骨・骨格標本、鳥類とその卵、爬虫類、魚類、貝類、甲殻類、無脊椎動物などに関しては、世界中で最も充実していた。また、同インスティテューション博物館の意義は、非常に多くの基準標本、または新種の標本の保管にあったとされる(Baird 1861: 76)。

またヘンリー長官は、知識増進のため同インスティテューションは博物学の標本をできる限り広範囲に利用させるべきであると考えていた。同種の類似標本(duplicate)の配布について、まずオリジナルな科学推進に必要な同定用として基準標本の類似標本を国内外の科学機関に配布し、残りの一般的な類似標本一揃い(種名等のラベルが貼付されているもの)を教育推進用として博物学の主要分野を教える大学や学術機関に寄贈するべきであるとし、研究優先の立場を示した。このような長官の考え方に則り、博物館では標本配布の準備が進められた(Henry 1861: 44-5)。

②調査・研究

博物館内の標本は全て、研究者の研究・調査に開放されていた。結果として、博物館は数多くの博物学研究の論文に寄与した。たとえば、スミソニアン・インスティテューションの標本の中で発見された新種の特性が、ボストン自然史協会(Boston Society of Natural History)の紀要にすでに掲載され、その詳細は研究論文に記述されることとなっていた。また、著名なアガシ教授が借用した「カメ」の標本に関する報告を怠ったというような記録も残っている。

1860年の時点で、骨格標本(卵、哺乳類、鳥類、爬虫類)のカatalog作成はほとんど完成していた。当時すでに、このような作業がボランティア・サービスの協力を得ていたことは(Baird 1861: 72-5)、興味深い。

③展示・教育

続いて、博物館内部の様子を具体的に示したい。博物館は、本館1階の大部屋（長さ61m、奥行き15m、高さ8m）が当てられた。その部屋には中2階があった。標本は垂直型のガラス・ケースに保存されていた。

次に、博物館に関する1860年のベアードの報告を見てみよう。展示されているほぼ全ての哺乳類、北米鳥類、異国の水トリに、学名および俗名のラベルが貼付された。また、以前は展示されていなかった多くの北米哺乳類・鳥類が剥製にされてケース内に展示された。古い剥製のスタンドは全て新しい物に置き換えられた。さらに、全骨格コレクションが展示された(Baird 1861 : 72-5)。この報告からは、着実に博物館が整備されていっている様子が窺える。前述のパテント・オフィスからのコレクション移管に伴って1858年に剥製師が採用されたが(Henry 1859 : 15)、これも博物館整備には欠かせない要因だったのであろう。

博物館自らコレクションを収集し、教育的観点に立った展示を行うようになるのは1876年のフィラデルフィア万国博覧会以降と指摘されるように(Farrington 1915 : 46)、1860年の時点では、博物館活動の3つの機能のうち「教育」機能を欠いていたと言ってもよい。

以上のように、万延元年遣米使節団が実見した、すなわち日本人が初めて公式に見た博物館は、動植物、鉱物、人類学的資料を扱う、自然史博物館であった^(註11)。このような博物学研究を対象とする博物館は、1786年フィラデルフィアにアメリカで最初のピール博物館が創設されて以来、伝統的かつ主流であった(Sellers 1980 : 332) ^(註12)。

3. 万延元年遣米使節団の自然史博物館受容

次に、万延元年遣米使節団が、実見した自然史博物館をどのように受容したのかを探求する。具体的には、(1)日記の中に博物館の記述を残す9人の使節団員の経歴を踏まえた上で、(2)その日記の内容を分析していきたい。

(1)使節団員の経歴

①佐野貞輔鼎（勘定組頭支配普請役益頭駿次郎尚俊従者、30歳）

スミソニアン・インスティテューションの自然史博物館を実見した最初の日本人である佐野は、駿河に生まれ、その後江戸に赴き下曽根塾に入った。下曽根金三郎は甲斐守信之と称し、蘭式砲術をもって幕府に仕え、また自ら蘭学・蘭兵学の塾を開いて塾生に教えていた。佐野はそこで蘭学を学び、蘭式鉄砲の製造および操法にも熟達し、19歳の頃塾頭になった。その後、幕府旗本の秋山安房守に招聘された。

1853年アメリカのペリーが浦賀に来港し、通商開国を求め、翌年ついに日米和親条約が締結された。このような状況を鑑み、加賀藩主前田斎泰は洋式砲術が急務であると考え、金沢の弓術練習場を廃し、その敷地を拡張して、初めて洋式武学校（壮猶館）を設けた。そこで、藩士の子弟に銃砲の操法を伝習する一方、西洋兵書の研究と語学の普及を図った。この時、佐野は招聘されて加賀藩士となり、蘭式砲術稽古方惣棟取となった。24歳の佐野は教授陣の最年少であったという。

その後、28歳の頃江戸に赴き、加賀藩邸近くに住んでいたとされる。佐野は、加賀藩から選出され、益頭駿次郎尚俊（勘定組頭支配普請役）の従僕として遣米使節団に加わった。当時外国渡航は幕府の役人かその家士に限られており、諸藩の士としては直接使節団に加わることができなかったので、3役・下役の家来や、その従僕となってそれに加わったのである。佐野の渡航の目的は洋式兵学や航海術を実地に学ぶことであった。佐野はもともと蘭学出身で英語には未熟であり、船中でアメリカ人から英語を習った。サンフランシスコから知人に宛てた手紙の中の「日々英語を朝六時より十二時迄、夕四時より五時迄、日々両度宛伝習申候」という文言からは、佐野の文明国アメリカからできる限りのものを吸収しようとする態度を見て取れる。

佐野は、帰国後、文久2年（1862年）遣欧使節にも賄方として参加する。その後、政府の要職に就き、共立学校の創設にも携わったとされる（長田・日置 1946 : 173-202）。

②柳川兼三郎當清(正使新見豊前守正興従者、25歳)

柳川は、新見の家従であり、江戸住まいであっただろう。生没年を含め、柳川の経歴は不詳である(富田 1985: 595)。

③玉蟲左太夫誼茂(正使新見豊前守正興従者、37歳)

玉蟲は、仙台藩士の家に生まれ、藩校養賢堂、藩儒齋藤真典などに学ぶ。その才能を認められて、13歳で同藩士荒井東吾の嗣子となり、後にその娘と結婚したが、1846年24歳の時に相続を辞し江戸に赴いた。脱藩した玉蟲は、江戸で大学頭林培斎の弟復斎の門に入った。その後、復斎が大学頭となると、玉蟲はその学力を認められて、塾長として師の代講を務めるほどになる。間もなく林家を辞して、江戸の仙台藩邸の順造館(学問所)に住み、江戸に学ぶ仙台藩の者達を督していたという。林家での成績を認められて、藩に復帰する可能性が生まれていたと推測されている。しかしその間、後の外国奉行堀織部正利熙に仕えるようになり、1857年には、箱館奉行となった堀とともに蝦夷地を踏査して『入北記』——地勢・気候・風土のほか人々の生活習慣・衣食住・産業の状態の観察・記録——を記す。

玉蟲は、正式に帰藩していないにもかかわらず、藩から遣米使節団に参加することを許されたとされるが、その詳細は判明していない。渡航前に玉蟲は、アメリカ事情が調査された『先牒記』(1849年)を読んで予備知識を貯えていた。また夷情探索の意志がかたく、軍事力、兵要地誌のみでなく、政情、風俗まで調べようと試み、このために、渡航中は乗組員と進んで話すようになっていった(松沢 1974: 626)。

帰国後玉蟲は、見聞を詳細に藩に報告し、藩士に列せられ、江戸勤務学問出精を命ぜられた。その後、養賢堂指南頭取を、後には学頭副役を命ぜられた。その後玉蟲は徐々に政治問題に関わるようになり、最終的には1869年47歳の時に切腹・家跡没収の処分を受けた(沼田 1974: 551-5、富田 1985: 382)。

④野々村市之進忠實(副使村垣淡路守範正従者、43歳)

野々村が、村垣の従者に選抜された前後の経緯や帰国後の動静は明らかでないが、父が奉行所勤務であったことも、選抜の理由として考えられるという。

明治維新当時、野々村は内藤家(信濃岩村田藩主)に仕え、戊辰の動乱には、江戸に踏みとどまったとされる。維新後、自活するために刀剣類一切を売り払い、これを資金として、洋行した経験を生かして本郷で洋品店を始め、のち呉服店に転業して終生これを家業とした(吉田 1960: 414)。

⑤福島恵三郎義言(監察小栗豊後守忠順従者、19歳)

福島は、生没年を含め、経歴不詳である(吉田 1960: 414、富田 1985: 504)。佐野同様、航海中早くから英語を習っており、アメリカでの見聞に対する志を窺うことができる。

⑥木村鐵太敬直(監察小栗豊後守忠順従者、31歳)

木村は、熊本出身であり、江戸で良斎安積翁に学んだ。詩文をよくし、歴史にも通じており、後にオランダの書物を読むようにもなる。良斎安積は1850年に幕府の儒者を拝命し、昌平學教授となる人物である。その後、木村は手塚律蔵の家塾で学ぶようになる。手塚律蔵はシーボルトに学び、英学・物理・化学を納め、幕府の蕃書調書教授となった人物である。木村は、藩公の命によって渡米した(松本 1974: 29-30)。後に、第5高等学校教授となっている(富田 1985: 228) (註13)。

⑦佐藤恒蔵秀長(賄方、37歳)

佐藤は、豊後杵築藩士であったが、外国方御用商人から差し出された賄方として使節団に参加した。文久2年(1862年)遣欧使節にも賄方として参加したが、その後の消息は不明である(松沢 1974: 624、富田 1985: 284)。

⑧村垣淡路守範正(副使、48歳)

村垣は、旗本の長男で江戸築地に生まれた。天守台下庭番・御台様御用人支配・細工頭・表台所頭を歴任して、1854年正月勘定吟味役となり、海防事務・外国応接の事に当たった。1856年7月箱館奉行に昇進し、同僚堀織部正利熙と開田に尽くし、蝦夷地を踏査した。1858年10月には外国奉行を兼任し、1859年4月御勝手勘定奉行、6月神奈川奉行をそれぞれ兼帯したが、同年10月、渡米を前に勘定奉行の兼任を解かれた。

帰国後、普通商条約交渉の全権委員などの任務の後、慶応4年に病のため隠居し、再び官職に就くことはなかった（日米修好通商百年記念行事運営会編 1961：25、富田 1985：575）。

⑨森田岡太郎清行（勘定組頭、49歳）

森田は、1812年に生まれ、7歳の時に代々幕府の下級役人である森田家の嗣子となる。1838年1月学問試業を受け、3月学問出精につき賞され、6月学問所出役を、翌年11月学問所勤番を命ぜられる。この役は、焼火間上下役、小普請、無役方などから、文学の心得のあるものが任命されるもので、林大学頭の支配に属し、神田昌平坂の学問所の事務を担当する。このような経過から、森田は文学に秀でていたとされる。1841年以後、徒目付小普請方改役勤役、小普請方改役、小普請方、と着実に昇進していき、1851年には代官に任命されるとともに、御目見以上に達せられた。勤務地は出羽国、甲斐国、摂津河内和泉三ヶ国支配と移り、1856年再び江戸に戻り御勘定組頭に任命される。

最も扶持の低い最下級の新参組頭であった森田がどのような理由で随員に選ばれたのかは明らかではない。新見、村垣、小栗に次いで第4位の重職を無事に果たして帰国後間もなく、1861年50歳で病死した（河北 1961：423-33）。

(2)使節団員の日記分析

続いて、使節団員の博物館に関する記述を分析していきたい。当時の博物館コレクションを把握するために、表3「博物館ホールの標本配置」を参照してほしい^(註14)。

①博物館ホール

博物館ホールは噴水を挟んで東西に分かれていたが、その様を木村は「二大堂」と表し、野々村はその広さをも含めて「下段ノ堂、長サ十四五間計、七八間ナルモノニツ有り」と言及する。

博物館ホールは、1階は動物類、中2階は鉱物や人類学標本、植物が展示されていた。福島は、「[中2階は] 各国ノ産物数品ヲ飾ル・・・下段[1階]ハ禽獣其他・・・」とし、各階の展示内容をなかなか正確に指摘する。また柳川は、「此所[中2階]

ハ金銀銅鐵其外諸國より生むる石の類を集めし處ニ其より一段下ゝいたり此處[1階]ハ前ゝしるしたる醫學館の類[パテント・オフィス]より前ゝ見たる所より廣大ゝて又品數も甚ゝ多し」と記述し、中2階の鉱物コレクションに言及し、さらに博物館1階は、パテント・オフィスと類似であるが、それより一層廣大でコレクションも多いとの比較・対照がなされている。「醫學館の類」という描写は、医学館で開催される薬品会を柳川が知っていたことを裏付けるものである。

②展示ケース

博物館の標本類が収蔵されていたガラス扉付き展示ケースについて、佐野は「家の中には戸棚の如きものを數ヶ所に置き、これに破[ママ] 璃板を張りたる障子を開閉すべく設く」と、村垣は「廣き堂内左右に硝子を覆ひたる棚」と、また森田は「玻璃ノ覆ヒセシ處」と、それぞれ記述する。このようなガラス扉の展示ケースは、当時まだ日本に普及していなかったために、使節団員の目を惹いたものと思われる。

③コレクション全般

表3からも明らかなように、博物館ホールに展示されていた標本は、多岐にわたり、またかなりの数にのぼっていた。使節団員はそれらを目の当たりにし、驚きを隠しきれない。森田は「奇獸珍禽虫魚ノ類・・・凡幾千ヲ以テ數フ」と、村垣は「萬國の物品鳥獸虫魚數萬種有」と、また玉蟲は「珍禽・奇獸并万国ノ什器・・・千品万什數フルニ暇アラズ、何レモ人目ヲ驚ス」と、柳川は「各國山海の鳥獸何れも奇ある計ニ」と、それぞれ記している。

野々村の「諸国ノ物ヲ集ム・・・其外国々ノ産物・禽獸・魚鼈・龍蛇・貝蟲等ノ者、類ヲ分ケ集ム」という描写は、多様な標本が展示されていただけでなく、分類もされていたことを示す。さらに、木村の「諸國ノ珍物ヲ收ム。禽[禽] 獸魚鼈龍蛇昆蟲草木器用。類ヲ分チ。紙驛(フダ)ヲ掲グ」という記述からは、ラベルが貼付されていたことがわかる。このラベルには、ベアードの報告にもあるように、種の学名・俗名が記されていた。他方佐藤は、「此家中普く世界上の奇禽獸魚貝武器衣服陶器及其他

種々の珍物を蔵む國人他州に至り珍物を得る毎に此所に納むといふ余輩未曾見の物十にして八九なり」と、コレクション収集の経緯にも言及する。

一方佐野は、「鳥獸魚鼈等凡て奇珍なるもの」と記し、また日本のコレクションにも言及した後、「我が邦のもの既に斯くの如し。況や從來通交の他國の物品をや。天下萬國の奇珍異物ここに集簇す。何の爲なるやを考ふる能はず。按ずるに、諸物を多く集めて衆民に示し、人の識見を廣からしむるものならんか。詳かに其の目を舉ぐるに暇あらず」と著述する。それまで通商をしてこなかった日本のものでさえそれほど多くのものが展示されていることに驚いたからであろう。佐野は、このような探検に伴う様々な珍品を目の当たりにし、コレクションの目的を考えざるを得なくなる。すなわち、世界各国から集められてきた多様なものは何のためであるのかを考える能力はないけれども、多様な物を多く集めて人々に示し、その識見を広くしようとしているのではないだろうか、と佐野なりに博物館の意義を考察するに至るのである。佐野は江戸にも住んでいたが、そこで開催されていた物産会を訪れたことがなかったのかもしれない。

④動物コレクション

剥製という展示形態に注目している者が多く見られる。まず哺乳類や鳥類の剥製について、野々村が「禽獸等ハ皮ヲ丸剥ニシテ中ニ物ヲ入レ生ガ如ス、毛羽ノ色、眼中ノ様子、生ルニ異ナル事ナシ」と、村垣は「鳥は生るか如く大成るは白鳥位の鳥もかす―有」と描写する。このほかに佐野、福島、木村、森田も剥製に言及しているが、いずれの描写からも生きているように精巧に作られていることに対する驚きが伝わってくる。

オランウータンやゴリラなど、大型類人猿は、使節団員の注意を惹いた。柳川は「猿の大ある有其丈ケ六尺餘」と記し、また佐藤は「長サ八九寸猿の種數十餘種あり其面各異なれり」と描写して大型類人猿の顔の相違に注目する。他方、村垣は「猿にも人体にひとしきものあり手足長きもの數十種」と、福島は「大キナル猿アリ、丈六尺余、容身人ニ異ス、惣身毛ノ長キコト三四寸」と、それぞれ記して、大型類人猿と人間とを比較・対照する。

展示されていたアザラシや海牛を描写したのは、村垣のみである。彼は「我蝦夷に見し海馬海豹」としてトド、アザラシ等海獣に言及する。蝦夷を踏査したおりにそれらを見たことがあったために、関心を示したのであろう。

ライオンを記述するのは、佐藤のみである。彼は「獅子ハ我國の畫圖に大に異り顔甚長く頸より肩に至り長き毛あり」と記して、ライオンが日本にある書画と異なることを自分の知識に照らして分析する。

シカなどを描写したのは、佐藤のみであり、「鹿又六七種あり手を廣けたる如きの角ある鹿あり大馬の如し此地にて馬に代へ用ひて車に駕すと云」と表現する。手を広げたような角といえば、ムースやヘラジカなどが考えられるが、佐藤は一体何を表したのだろうか。一方、馬に代わって車を引くというのは、極北地域のトナカイだったと考えられる。

哺乳類・鳥類が剥製として展示されたのに対し、両生類・爬虫類はアルコール漬けであった。それらについて、森田は「魚虫ノ類ハ焼酎ニヒタシ玻瓈壺エ入レ」と記したほか、佐野、福島、木村もそれに言及している。柳川は「蛇の種類計七百餘を集其餘數多_よて筆_ふ載せ_りふ_し」と、その数の多さに驚きを示す。他方、村垣は「蛇蟻の類または蛙などは瓶に入て焼酒に漬たる萬の數もあれば見も心地あしき事也」として、液漬標本のヘビ、カエル等の爬虫類、両生類がたくさんあるのは見るのも気持ち悪いとして嫌悪感をあらわにする。

⑤文化人類学のコレクション

ペリーの日本遠征に伴うコレクションは当初パテント・オフィスに保管されていたが、他の政府探検隊・学術調査隊コレクション同様、1858年以降スミソニアン・インスティテューションに移管されていた。なお、ペリーのコレクションはスミソニアン・インスティテューションによって近年カタログ化されている(Houchins 1995)。この日本のコレクションをほとんどの使節団員が興味深く実見した。

佐野は「悉く我が邦の物品のみを置き、先年水師提督ペルリに賜はりたる無紋の熨斗目、婦人の打掛、白無垢の下着等、衣服の類を多く集む。又他の一所に刀劍等の類を集め、長刀・白鞘の新身、其の外農

具の内鍬・鋤などこれあり」と記し、佐藤は「塗物陶器・・・草履〔ママ〕下駄草鞋足袋」に言及し、さらに森田は「大黒天木像宮エ入レシアリ、奉書小札ニ使節エ松崎満太郎トアリ、是ハ拙ガ知ル処ノ御儒者ナリ、ヘルリ渡来ノセツ下田エ御用ニテ相越」と知り合いの儒者の名を見つけて記録に留めている。この松崎満太郎とは、大学頭で使節受入委員の林煒の秘書であった。また玉蟲は、「パテントオフユシニ比スレバ、我国ノ什器多シ」として、標本数をパテント・オフィスと比べている。このほかにも柳川、野々村、福島が日本のコレクションに言及している。

このほか1階に、アメリカ人医師ケーン (Dr. Elisha Kent Kane, 1820-57) が、北極探検の際に着用した衣服が展示されていた。彼はアメリカ・カールトによる北極探検の先駆者とされる (Malone ed. 1933: 256-7)。これに言及するのは、玉蟲のみである。彼は「獣皮」製のその服について、「獣皮ニテ製シタル人形アリ、丈ケ六七尺ナリ。是古昔米医寒国ニ行シトキ服シタル衣ナリト云フ」と、その由来まで記述しているが、蝦夷地を踏査した玉蟲だったからこそ、この衣服に関心を示したのであろう。

⑥自然人類学のコレクション

中2階には、エジプトおよびペルーのミイラが展示されていた。野々村は「人間ノ乾物モ三人有リ」と簡単に記録し、森田は「人骸ノ乾堅メシモノ三人アリ、二人ハエヂツトノ者、一人ハメキシコノ者ノ由、式百年前ノ骸骨ト云」とその出所をも記す。

村垣は「人骸の乾物三つ有千年を経しものといふ野晒の如きものにはなし肉皮とも乾きて全骸立たり男女といへと見わけかたし天地間の萬物を究理する故斯の如きに至るといへど鳥獸虫魚とひとしく人骸を并て置は言語に絶たり額に汗するといふ古語に反復せり則夷狄の名はのかれぬ成るべし」と記す。ミイラ製作時期に関して、森田とは記述が異なる。村垣が、アメリカ人の「屍体に対する取り扱いに義憤を感じている」ことは明白であり (椎名 1988: 23)、そこには、「伝来の華夷観念がほとんどそのまま示されている」。村垣は副使として見聞の機会には恵まれた立場にあったし、文雅をたしなみ、異国の文物や風物に対する感受性は決して低くはなかった。

しかし多くの見聞やそれを受けとめた新鮮な感情も、自国とアメリカについて考える枠組や価値基準に変化をもたらすにはいたらなかったのである。そのアメリカ像は、直接の見聞によって細部にわたって具体性を増したものの、アメリカを捉える思考パターンとしては西洋の文物を全面的に拒否する夷狄観から、技術的なことがらについて採長補短の余地を認める夷狄観へと若干変わった程度にとどまるとされる (松沢 1974: 636-7)。

他方、玉蟲は「人ノ全骸ヲ乾固シタルアリ、老少取合せ四五人アリ、是ヲ見レバ覺ヒズシテ悸々タリ」と記し、ミイラが4、5体——村垣らは3体と記す——あり、それを見ると思わず恐れ胸騒ぎがするとしている。村垣が、ミイラをアメリカの夷狄の証拠として取り上げるのに対し、玉蟲はミイラによってアメリカ人を夷狄とは考えていない。アメリカ人乗組員の練達や親切を認識することが、日本の旧体制のイデオロギーとしての夷狄観を乗り越える契機となったとされる。概して使節団内部で疎外された人ほど、アメリカ人の善意に敏感に反応したという (松沢 1974: 628)。日本の階層構造が投影されていた使節団の中で、従者である玉蟲はまさしく弱者だったのである。

⑦南ホールのコレクション

1階の南ホールにはジョージア産の生きているワニが展示されていたが、これは、当時の博物館の目玉の一つであった。使節団員は、この珍品に、当然のこと関心を示している。福島はワニを知らなかったらしく、「鯉ノ大ナルヲ見ル、瑣〔瑣〕子ヲ以箱ノ如クニ作りタル者ニ水ヲ入テ放ツ、長五尺余、全軀恰モ石ノ如シ」と、ワニを「鯉ノ大ナル」と描写する。森田は「生ケル鰐魚銅盤中ヘ貯ヘアルヲ引出シ示ス、長四尺程ノ小鰐ナリ、兇狀猛威可畏魚也」と記述する。一方、村垣は「かねの水盤に網蓋したる中に鰐魚の生たる有板敷に出して棒もて打てはいかりて口を開く實に鰐口とて大なり形はやりに似て脊に鱗あり長さ四尺はかりなり」と表現し、ワニの形態から判断してそれをやりに似ていると捉えた。

これまで、博物館コレクションの内容やその展示

方法に関する使節団員の記録を見てきた。彼らは、博物館を、動植物、鉱物、人類学的資料が分類された上で展示されていると認識しており、自然史博物館としての実態を概ね正確に理解したと言ってよい。科学的知識を欠いていたがために、ヘンリー長官の最新の物理実験を「さま—の奇術」と評価した村垣でさえ、博物館の実態をほぼ正確に認識したように思われる——しかしミイラの理解に際しては、自身の夷狄観をそのまま投影したのであるが。

興味深いのは、使節団員がそれぞれ自分の経験に照らし合わせて、感心ある展示物を取り上げ、観察・分析している点である。玉蟲は、『入北記』の際の観察・記録の経験もあり、その詳細な記述ぶりは使節団員の中でも評判であった。そのような玉蟲の日記をあてにして、帰国後に借用する約束をしている者もいたという^(註15)。しかしながら、こと博物館の記述に関しては、使節団員ひとりひとりが思い思いに、自分の言葉で記録を残した。これは、博物館のインパクトがそれほど強かったことを示唆するものである。

おわりに

本稿では、遣米使節団によるスミソニアン・インスティテューションの自然史博物館実見について具体的に記述してきた。その結果、この見聞は、西洋自然史博物館受容過程における歴史的事実として軽視されるべきではないことが判明した。

では、帰国後彼らの経験はどのように活かされたのであろうか。攘夷運動の激化に伴って、幕府は外国の影響を極力抑える方向に政策転換した。このため、帰国後の使節の動静については見るべきものがほとんどないとされている(沼田 1974: 607)。たとえば新見が、アメリカでの見聞を十分に述べる機会がなかったまま1869年にこの世を去ったのをはじめとして(富田 1985: 318)、3使節とも維新後の新政府に仕えることがなかったのである。すなわち、彼らの自然史博物館での経験は、トップダウンというかたちで直接的に博物館創設へは繋がらなかった。それでは、間接的に博物館創設に影響を与えた可能性はないのだろうか。

まず第1に、3使節によって報告されたアメリカの先進技術などは明治政府によって看過されること

はなかった——それは明治政府最初の岩倉使節団がヨーロッパより先にアメリカ合衆国を訪問したことからも明白である(Aruga 1976: 143)——が、3使節の報告書、日記等に記載されたアメリカの自然史博物館における見聞も、先進技術などとともに、明治政府に引き継がれた可能性がある。

また実情視察は、「小者」として参加した志と知性ある人々を中心に、個々に行われたという指摘もあるように(松沢 1974: 637)、3使節以外の人々の報告・記述内容にも目を向ける必要がある。使節団員の日記や報告書の写本は、攘夷運動が激化する中にあっても、ひっそりとしかし熱心に読まれ続け(ミヨシ 1984: 140)、明治時代にも残った。すなわち、それらに記述された自然史博物館に関する詳細な記述も、読み継がれていったのである。

第2に、使節団員のうち5人——日高圭三郎爲善(徒目付)、益頭駿次郎尚俊(勘定組頭支配普請役)、佐野貞輔鼎(勘定組頭支配普請役益頭駿次郎尚俊従者)、佐藤恒蔵秀長(賄方)、川崎道民勤(御雇医師)——が文久2年(1862年)遣欧使節団に参加し、名村五八郎元度(通詞)は1866年遣露使節団に参加した。総じて彼らのアメリカでの体験は、後の西洋訪問の際の拠り所となったことは言うまでもない。スミソニアン・インスティテューションの自然史博物館での経験が、後の西欧博物館視察の際の比較基準となったのではないだろうか。

第3に、使節団員の中には、帰国後、後進指導にあたり、アメリカで得た知識を直接生徒に伝える機会をもった者もいる。このような過程で、自然史博物館に関する知識が次世代に受け継がれた可能性もなしとしない。たとえば、1867年勝海舟の子息勝小鹿がメリーランド州のアナポリス海兵学校に留学した際、玉蟲の教えを受けた仙台藩士富田鉄之助、高橋和喜次が同行している(松沢 1974: 672、富田 1985: 191-2)。玉蟲のアメリカでの見聞が富田らの拠り所にはならなかっただろうか。

第4に、村垣の日記には、ヘンリー邸に招かれた際に「此局の事を記したる小冊を贈けり」とあることから、ヘンリーがスミソニアン・インスティテューションに関する書物を彼に贈呈したことは明らかである。残念ながら、それが何であったのかは判明していないが^(註16)、同インスティテューショ

ンの案内書や年報であった可能性がある。一般的に、アメリカで贈呈された書物は、蕃書調方に収蔵され、役人や研究者に利用されたことを勘案すると、この書物も広く利用された可能性がある。

以上のように、遣米使節団の自然史博物館での見聞が間接的に日本に影響を与えた可能性を考え合わせれば、西洋自然史博物館受容過程における同使節団の意義をなおさら軽視すべきではないであろう。

表1 使節団員のスミソニア・インスティテューション見学日程

見 学 日		見学者名			役職名
日記所見の日付	米国洋暦		年齢		
4月2日	5月21日(月)	佐野 貞輔	30	勘定組頭支配普請役益頭駿次郎尚俊従者	
4月7日	5月26日(土)	柳川 兼三郎	25	正使新見豊前守正興従者	
		玉蟲 左太夫	37	正使新見豊前守正興従者	
		野々村市之進	43	副使村垣淡路守範正従者	
		福島 恵三郎	19	監察小栗豊後守忠順従者	
		木村 鐵太	31	監察小栗豊後守忠順従者	
		佐藤 恒藏	37	賄方	
4月12日	5月31日(木)	益頭 駿次郎	32	勘定組頭支配普請役	
		日高 圭三郎	24	徒目付	
		宮崎 立元	34	寄合医師	
		村山 伯元	32	御番外科	
4月14日(註1)	6月2日(土)(註2)	新見 豊前守	40	正使	
		村垣 淡路守	48	副使	
		名村 五八郎	34	通詞	
4月17日	6月5日(火)	森田 岡太郎	49	勘定組頭	
		塚原 重五郎	36	外国奉行支配調役	
		立石 芹次郎	17	通詞見習	

(註1) 名村は、日付変更線を認識していたので13日と記載。

(註2) ヘンリー長官が実験を披露。

出典：稿末の文献に挙げた使節団員の日記を基に作成

表2 博物館における年次別コレクション登録数

	1851年	1852年	1853年	1854年	1855年	1856年	1857年	1858年	1859年	1860年
骨格・頭蓋骨	911	163	116	85	775	1,010	280	73	237	700
哺乳類		114	84	153	849	846	1,154	26	524	825
鳥類				4,353	72	1,430	2,911	2,624	4,523	4,962
爬虫類						106	133	4,131	246	67
魚類						155	458	523	604	1,235
鳥類の卵								1,032	1,493	1,900
甲殻類								939		40
軟体動物									2,000	6,832
放射相称動物									1,100	208
化石									171	534
鉱物									793	339
民族学標本										550
計	911	277	200	4,591	1,696	3,547	4,936	9,348	11,691	18,192

出典：Baird (1861：73) から作成

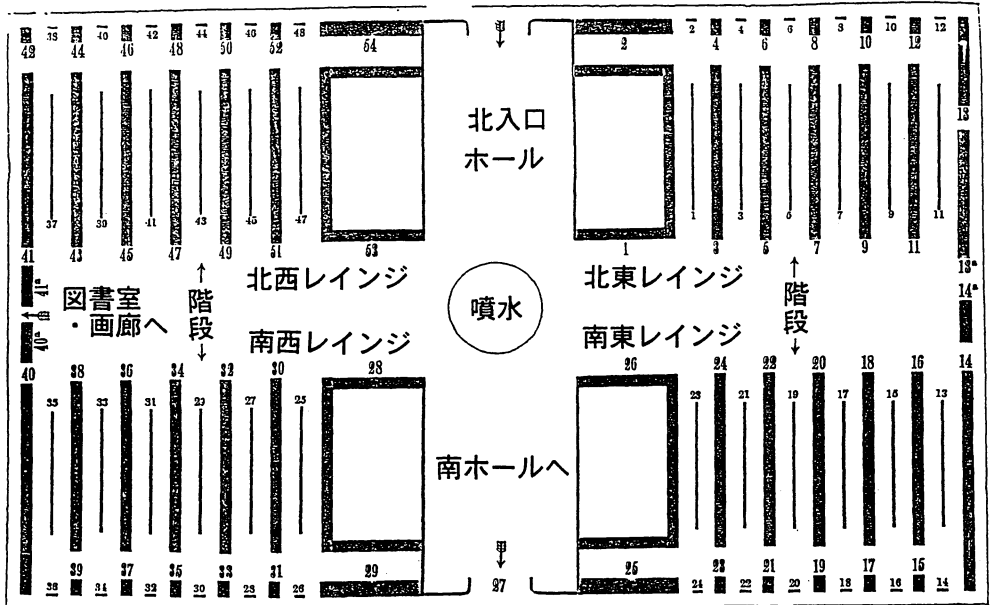
表3 博物館ホールの標本配置(1)

1階	北東レインジ	主に哺乳類、外国の鳥類、北米の魚類
	ケース1	Foxes, Wolves, Jaguars, Wild Cats, Panthers, Ant-eaters, Earth-hogs, Peccaries
	ケース2,4,6,8,10,12,13	Fishes
	ケース3	Doves, Pigeons, Quails, Partridges, Wild Cocks, Pheasants, Peacocks, Lyre Birds, Grouse
	ケース5	Goldfinches, Yellow-birds, Crossbills, Starlings, Cassicans, Satin-birds, Jays, Black-birds, Tanagers, Shrikes, Wrens, Manakins, Sparrows, Magpies, Buntings
	ケース7	Kingfishers, Swallows, Humming Birds, Birds of Paradise
	ケース9	Parrots, Paroquets, Lories, Cockatoos, Barbets, Cuckoos, Woodpeckers, Flickers, Trogons
	ケース11	Hawks, Harriers, Kites, Falcons, Eagles, Horn-bills, Peacock Trogons, Owls
	ケース13a	Condors, Vultures, Carrion Crows
	南東レインジ	北米の鳥類、爬虫類、海洋動物
	ケース14,15,17,19	Serpents in alcohol
	ケース14a	Eagles, Fish Hawks
	ケース16	Hawks, Owls, Kites, Buzzards, Vultures
	ケース18	Woodpeckers, Flycatchers, Pewees, Kingbirds, Flickers, Thrushes, Warblers, Swallows, Wrens, Buntings, Finches, Nuthatches, Titmice, Robins, Grosbeaks, Snow-birds
	ケース20	Blackbirds, Grackles, Jays, Ravens, Orioles, Partridges, Grouse, Sage Cocks, Sandpipers, Rails, Snipe, Marsh-hens, Quails, Knots
	ケース21	Lizards
	ケース22	Ducks, Teals, Nest and egg of Eider Duck, Wild Turkeys, Herons, Cranes
	ケース23	Frogs
	ケース24	Terns, Gulls, Tropic birds, Man-of-War Bird, Petrels, Cormorants, Loons, Boobies, Gannets, Swans, Pelicans, Brant, Geese
	ケース25	Salamanders and Turtles in alcohol
	ケース26	Alligators, Seals, Sea-cows, Albatrosses, Sawfish, Porpoise, Sturgeon, Shark, Gar-fish
	北西レインジ	魚類、外国の鳥類、爬虫類
	ケース41,43,44,46,48	Fishes
	ケース42	Sea eggs, Sea urchins
	ケース45	Gulls, Noddies, Terns, Penguins, Petrels, Grebes
	ケース47	Tropic birds, Gannets, Pigeons, Albatross, Cormorants, Pelicans, Petrels
	ケース48,50,52,54	Reptiles
	ケース49	Geese, Swans, Ducks, Flamingos, Coots, Rails, Shovellers
	ケース51	Ibis, Lapwings, Curlews, Snipes, Cranes, Storks, Bitterns, Herons, Spoonbills
	ケース51と53の間	Dress worn by Dr. Kane and Relics of Sir John Franklin
	ケース53	Deer, Llama, Reindeer, Elk
	南西レインジ	北太平洋探検による哺乳類、放射相称動物、甲殻類、爬虫類、魚類
	ケース28	Bears, Orang Outang, Gorilla, Monkeys, Bighorn or Mountain Sheep, Wolverines, Otters, Flying Lemurs, Taguans, Fox Phalangiers, Kangaroos, Antelopes
	ケース29	Fishes
	ケース30	Bats, Hedge-hogs, Moles, Sloths, Weasels, Ermines, Sables, Minks, Martens, Raccoons, Ferrets, Hares, Rabbits, Possum Cats, Dasyures, Pagumas
	ケース31	North American Toads
	ケース32	Squirrels, Gophers, Mice, Hares, Beaver, Marmots, Rabbits, Porcupines, Moles, Woodchucks, Armadillos, Guinea pigs
	ケース33	Star fishes
	ケース34,36,38	Corals, Sponges, Sea weeds
	ケース35	Shell-fishes
	ケース37,39,40	Crabs
	南ホール	シリアのバイルートの石棺、カリフォルニアのセコイアの厚板、スベリオル湖鉱山の銅、ジョージア産の生きているワニ、ニカラグアの偶像
中2階	北東ギャラリー	鉱物学、地質学、古生物学のコレクション
	南東ギャラリー	人間の頭蓋骨、頭蓋骨と骨格、爬虫類の皮と魚類の皮、植物
	ケース63	Human Skulls
	ケース64-67	Skulls and Skeletons
	ケース68	Skins of Reptiles and Fishes
	ケース69-69a	Botany
	北西ギャラリー	東インド諸島、中国、日本、南米、アフリカの民族学的コレクション
	ケース78-79	Mummies from Egypt and Peru
	南西ギャラリー	フィジー、サンドイッチ、マルケサス、ニュージーランドおよび他の諸島の民族学的コレクション
	テーブル・ケース	巣と卵、隕石、鉱石、貝殻、カメ
	ホールの中心-東端	Nests and eggs. The Meteorite. Ores
	ホールの中心-西端	Shells, Turtles

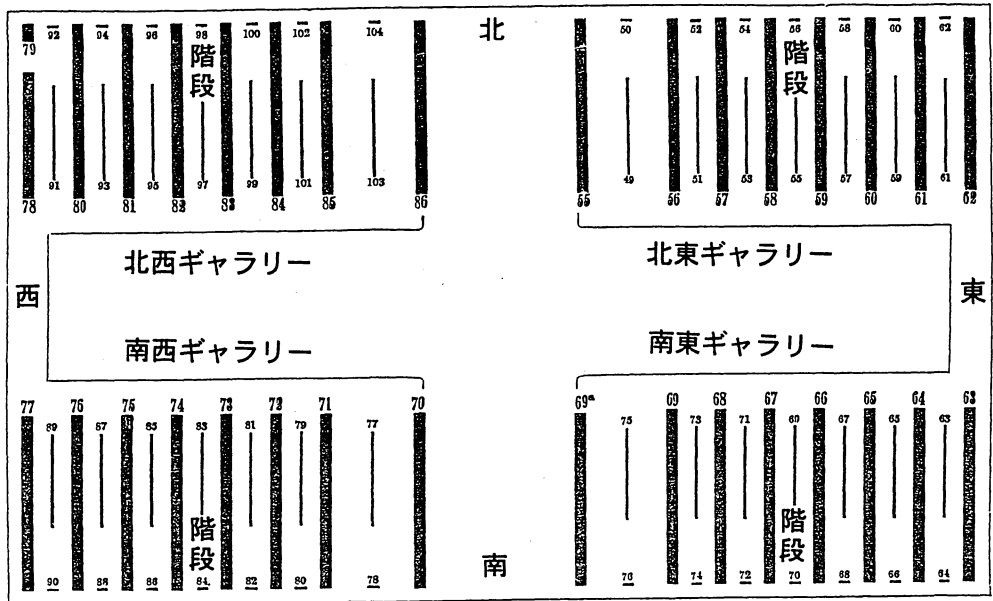
出典：Rhees (1863：4) から作成

図1 博物館ホールの標本配置(2)

(太線=直立型ケース1~86; 細線=テーブル・ケースやウィンドウ・ケース1~104)



中2階



出典: Rhees (1863: 2-3) から作成

註

(註1) このほか、使節団員はニューヨーク滞在中にも博物館を訪れた(ミヨシ 1984: 82)。これは、バーナム(P. T. Barnum)の博物館のことである。日高圭三郎爲善(徒目付)の将来品の一つに、アメリカ自然史博物館(American Museum of Natural History)発行による「日中、晩のいつでも日本人の入場を許可する——パルケットを含む」と書かれた優待入館券が見出される(日米修好通商百年記念行事運営会編 1961: 276)。このバーナムの博物館は、彼自身が「ショーマン」と称されていたほか、コレクションに「フィージーの人魚」や「あごひげのある女性」などが含まれていたこともあって、とかく見世物的であり科学的ではないとされる。たとえばミルハウザー(1995: 263-94)は、その博物館の非科学的な面を誇張する。しかしながら同博物館は、合衆国最初の博物館として名高いピール博物館の良質の自然史コレクションも吸収しており、動植物、鉱物、化石などの多様な標本コレクションも有していたことには、留意すべきであろう(Johnson ed, 1928: 636-9)。

(註2) Journal of the Commission, in Charge of the Japanese Embassy to the United States 1860, W9-18480, Hagley Library Archives

(註3) Rodgers' suggestions, W9-9757, Hagley Library Archives

(註4) Henry to the President, 26 April 1860, W9-9756, Hagley Library Archives

(註5) Henry to Du Pont, 17 May 1860, W9-9863, Hagley Library Archives

(註6) Letter Book of Commission in charge of Japanese Embassy, W9-3269, Hagley Library Archives

(註7) Henry to Du Pont, 30 May 1860 Joseph Henry Paper

(註8) Journal of the Commission, in Charge of the Japanese Embassy to the United States 1860, W9-18480, Hagley Library Archives

(註9) 1860年当時のスミソニアン・インスティテューションの実態およびそれに対する使節団員の理解については、財部(1998)を参照。

(註10) パテント・オフィスから移管された49のコレクションのリストはBaird (1859: 52-5)を参照。

(註11) 当時の案内書から明らかなように、スミソニアン・インスティテューションは同博物館を「国立博物館」とみなしていた(Rhees 1857)。

(註12) ピール博物館の創設・発展については、小川・財部(1998: 75-9)を参照。

(註13) 帰国後間もなく西洋再訪の志を抱いたまま病没したという説もある(松沢 1974: 624)。

(註14) 博物館のイラスト、および使節団員ごとの博物館に関する記述については、財部(1998: 168-72)を参照。

(註15) 『幕末外国関係記録抄』によれば、玉蟲左太夫の日記10巻の中の「同船中七十人程日記」には玉蟲の物を頼みにして自分ではろくに記さないで帰着の上貸してくれと約束していた者がいたと記されている(日米修好通商百年記念行事運営会編1961: 223)。

(註16) 「正使一行の将来遺品及び図書」の中には、該当物はない(日米修好通商百年記念行事運営会編 1961: 271-306)。

文 献

アボット、デービッド編 渡辺正雄監訳 1986

『世界科学者事典4: 物理学者』原書房: 191.

Aruga, Tadashi 1976 The First Japapaese Mission to the United States 1860, *Abroad in America: Visitors to the New Nation 1776-1914*, Addison-Wesley Publishing Company: 135-144.

Baird, Spencer 1859 "Appendix to the Report of the Secretary" *Annual Report of Smithsonian Institution, 1858*, Smithsonian Institution: 44-62.

Baird, Spencer 1861 "Appendix to the Report of the Secretary" *Annual Report of Smithsonian Institution, 1860*, Smithsonian Institution: 63-77.

- Farrington, Oliver C. 1915 "The Rise of Natural History Museums" *Proceedings of the American Association of Museums* 9 : 36-53.
- 福島義言 1960 「花旗航海日誌」『万延元年遣米使節史料集成第3巻』風間書房：279-400.
- Henry, Joseph 1859 "Report of the Secretary" *Annual Report of Smithsonian Institution, 1858*, Smithsonian Institution : 13-43.
- Henry, Joseph 1861 "Report of the Secretary" *Annual Report of Smithsonian Institution, 1860*, Smithsonian Institution : 12-62.
- Houchins, Chang-su 1995 *Artifacts of Diplomacy: Smithsonian Collections from Commodore Matthew Perry's Japan Expedition (1853-1854)*, Smithsonian Contributions to Anthropology no. 37, Smithsonian Institution Press.
- 日高爲善 1961 「米行日誌」『万延元年遣米使節史料集成第2巻』風間書房：1-43.
- Johnson, Allen ed. 1928 *Dictionary of American Biography*1, Charles Scribner's Sons.
- 河北展生 1961 「解題」『万延元年遣米使節史料集成第1巻』風間書房：419-38.
- 木村鉄太 1974 『航米記』(肥後国史料叢書第2巻) 青潮社
- 倉田公裕・矢島國雄 1997 『新編 博物館学』東京堂出版
- Malone, Dumas ed. 1933 *Dictionary of American Biography*10, Charles Scribner's Sons.
- Malone, Dumas ed. 1935 *Dictionary of American Biography*16, Charles Scribner's Sons.
- 松沢弘陽 1974 「さまざまな西洋見聞：「夷情探索」から「洋行」へ」『西洋見聞集』(日本思想体系66) 岩波書店：626-679.
- 松本雅明 1974 「解題」『航米記』(肥後国史料叢書第2巻) 青潮社：解説1-37.
- ミルハウザー, スティーヴン著 柴田元幸訳 1995 『バーナム博物館』ベネッセコーポレーション
- ミヨシ, マサオ著 飯野正子ほか訳 1984 『我ら見しまに：万延元年遣米使節の旅路』平凡社
- 森田岡太郎 1961 「亜行日記」『万延元年遣米使節史料集成第1巻』風間書房：1-270.
- 村垣淡路守範正 1928 「遣米使日記」『遣外使節日記纂輯第1』日本史籍協会：1-207.
- 村山伯元 1961 「奉使日録」『万延元年遣米使節史料集成第2巻』風間書房：279-343.
- 長田富作・日置謙 1946 「佐野鼎小傳」『萬延元年訪米日記』金澤文化協會：173-202.
- 名村元度 1961 「亜行日記」『万延元年遣米使節史料集成第2巻』風間書房：191-277.
- 日米修好通商百年記念行事運営会編 1961 『万延元年遣米使節史料集成第7巻』風間書房
- 野々村忠實 1960 「航海日録」『万延元年遣米使節史料集成第3巻』風間書房：131-277.
- 沼田次郎 1974 「幕末の遣外使節について：万延元年の遣米使節より慶応元年の遣仏使節まで」『西洋見聞集』(日本思想体系66) 岩波書店：599-620.
- 小川眞里子・財部香枝 1998 「フィラデルフィアの科学者たち：独立間もないアメリカの博物学と医学」三重大学人文学部文化科学研究紀要『人文論叢』第15号：69-91.
- 尾佐竹猛 1948 『幕末遣外使節物語：夷狄の国へ』(尾佐竹猛全集第7巻) 実業之日本社
- Rhees, William J. 1857 *An Account of the Smithsonian Institution, its Founder, Building, Operations, etc.*, Collins Printer.
- Rhees, William J. 1863 *An Account of the Smithsonian Institution, its Founder, Building, Operations, etc.*, Collins Printer.
- Rivinus, E. F. and E. M. Youssef 1992 *Spencer Baird of the Smithsonian*, Smithsonian Institution Press.
- 佐野鼎 1946 『萬延元年訪米日記』金澤文化協會
- 佐藤秀長 1928 「米行日記」『遣外使節日記纂輯第1』日本史籍協会：405-510.
- Sellers, Charles Coleman 1980 *Mr. Peale's Museum*, W. W. Norton.
- 椎名仙卓 1988 『日本博物館発達史』雄山閣出版
- 椎名仙卓 1989 『明治博物館事始め』思文閣出版
- 財部香枝 1998 「幕末における西洋博物館の受容：万延元年(1860年)遣米使節団が実見した博物館」名古屋大学情報文化学部・名古屋大学

-
- 大学院人間情報学研究科研究紀要『情報文化研究』第8号：161-179.
- 玉虫左太夫 1974 「航米日録」『西洋見聞集』（日本思想体系66）岩波書店：7-259.
- 東京国立博物館編 1973 『東京国立博物館百年史』東京国立博物館
- 富田仁編 1985 『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ
- 上野益三 1973 『日本博物学史』平凡社：56-9.
- Yanaga, Chitoshi 1940 “The First Japanese Embassy to the United States”, *The Pacific Historical Review*, vol. IX No. 2 1940: 113-138.
- 柳川兼三郎當清 1928 「航海日記」『遣外使節日記纂輯第1』日本史籍協会：209-404.
- 吉田常吉 1960 「解題」『万延元年遣米使節史料集成第3巻』風間書房：401-415.
- ※本稿の一部は、日本科学史学会第45回年会（1998年5月、愛知大学）および History of Science Society 1998 Annual Meeting（1998年10月、カンザス・シティ）における筆者の発表に基づく。